

交通体系の整備に伴う地方中枢都市の変容

——高松市を事例として——

山 本 佳 世 子

香川県高松市は、人口約33万人の、香川県の県都で、四国地方の地方中枢都市という性格をもつ都市である。また、四国の玄関口という地理的条件のために、交通機能及び流通機能が従来から卓越している。

近年、瀬戸内海沿岸地域では、三大本四架橋ルートの建設や高速道路網の整備等によって、交通環境には著しい変化がみられる。特に高松市の周辺では、香川三大プロジェクトに指定されている、瀬戸大橋の開通（1988年）、新高松空港の開港（1989年）、四国横断自動車道の整備（1992年完成予定）等によって、交通体系の整備・確立が著しく進んでいる。以上のような交通体系の変化の進行は、様々な分野において、高松市に影響を与えたであろう、と予想できる。そこで、本研究の目的は、四国地方の地方中枢都市としての高松市が、近年の交通体系の整備が進む状況下で、どのように変容するかを考察することにある。

本研究では、「人口・労働力」、「都市機能」、「市民の生活圏」という三つの面を通して、交通体系の整備に伴う高松市の変容状況を考察した。その結果、1990年の「国勢調査」が、現時点では、公表されていないので、信頼性の高い資料での検証できなかったが、これらの三つの面において、高松市は、近年の交通体系の整備・確立の影響を大

きく受けていることが明らかになった。特に四国横断自動車道を始めとする道路交通の整備・確立は、今後、瀬戸大橋と新高松空港の高松市へのインパクトを最大限に生かし、高松市を発展させる引き金となるであろう、と予想できる。また、高松市は、従来から港と共に発展してきた都市であるため、瀬戸大橋開通によって衰退した港を活性化させることや、港を起点とした道路網の整備も重要である。

さらに、本研究の結果、高松市は、「地方中枢都市」及び「商業・観光都市」という、二つの面をもつ都市であることが明らかになった。今後は、これらの二つの面において、交通体系の整備・確立の利点をどのように生かし、第三次高松市総合計画の目標である「瀬戸の都・高松」としての特色ある都市づくりをどのように推進してゆくか、ということが高松市の課題であると考えられる。

現在では、1994（平成6）年の東四国国体や将来の本四三ルート時代に備えて、行政・経済・社会等の様々な分野において、高松市及びその周辺地域への一極集中が進み、県内格差の拡大という問題が生じている。そのため、今後は、香川県内の各市町が、近年の交通体系の整備・確立という利点を生かすように、努力することが是非とも必要となる。